

平成22年度歯学教育者のためのワークショップ報告

著者	増原 正明
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	32
ページ	77-79
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/10232/17057

平成22年度歯学教育者のためのワークショップ報告

増原 正明

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
先進治療科学専攻 生体機能制御学講座
歯科応用薬理学分野

平成23年1月29日、歯学部FD委員会主催で「平成22年度歯学教育者のためのワークショップ」がスタッフ5名（ディレクター：田口則宏教授，タスクフォース：田松裕一准教授，鎌下祐次講師，諏訪素子診療講師，河野博史助教）および歯学部各分野からの参加者18名によって行われた。このワークショップのテーマは「歯科医学教育における教育能力開発」であり、現状の問題点を認識しどのように改善するかを参加者各自が考えることを目的としていた。

この目的のために以下の6つのセッションを行った。

セッション1：「望ましい学習活動の特徴」

グループ討論30分，発表・全体討論20分

セッション2：「指導者の役割」

グループ討論20分×3，発表・全体討論15分

セッション3：「鹿児島大学歯学部の抱える教育上の問題」（問題抽出）

グループ討論50分，発表・全体討論15分

セッション4：「鹿児島大学歯学部の抱える教育上の問題」（問題分析）

グループ討論45分，発表・全体討論・解説30分

セッション5：「学習者中心の教育」

レクチャー30分

セッション6：総合討論

セッション1からセッション4までは3グループに分かれてのグループ討論後，発表と全体討論が行われた。まずセッション1では，各自もっとも印象に残っている学習体験を絵で表現し，討論を通じてグループの考える「望ましい学習活動の特徴」をまとめた。研究に関する体験，解剖実習をはじめとする学生実習，留学時の体験等の他，友人・先輩・後輩との関わりな

ど多くの意見が出されたが，キーワードの1つとして「達成感」が挙げられるように思われた。

続くセッション2では「ワールドカフェ」形式を用いて，参加者がグループ間を移動しながら討論を行い，「指導者の役割」というテーマについて対話（ダイアログ）を行った。この協議の中から，知識など専門的能力は勿論であるが，それ以外に「信頼」「人間性」などが多くの参加者からキーワードとして挙げられた。

昼食後のセッション3では「鹿児島大学歯学部の抱える教育上の問題」についてKJ法を用いてグループ討論を行った。グループ作業の一例を図1に示す。図1に示した意見以外には，学生の学力およびモチベーション，講座間の連携の少なさ，臨床実習での実際に治療を行う機会の少なさなどが問題点として述べられた。

さらに抽出された問題点を重要度および緊急度の二次元空間に配置して最重要課題を決定し，決定した課題について具体的解決方法の議論を行った（セッション4）。セッション4でのグループ作業の例を図2に示す。図2で示した例以外では，「臨床実習」を課題とし，「他科の教員同士また教員と学生の交流拡大が必要」，「講座間のコミュニケーションのための定期的なカンファレンス」「臨床実習配当患者の治療を全て（診療科をまたいで）見学・対応できるように」などの意見が出された発表などがあった。

セッション5では田口教授から「学習者中心の教育」と題してレクチャーが行われた。まず大学を取り巻く環境の変化から，いわゆる「学士力」についてこれまで以上に考えなければならなくなっていること，またその際にディプロマ・ポリシー，つまり学位の水

グループ作業の一例 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題点(問題点抽出)」

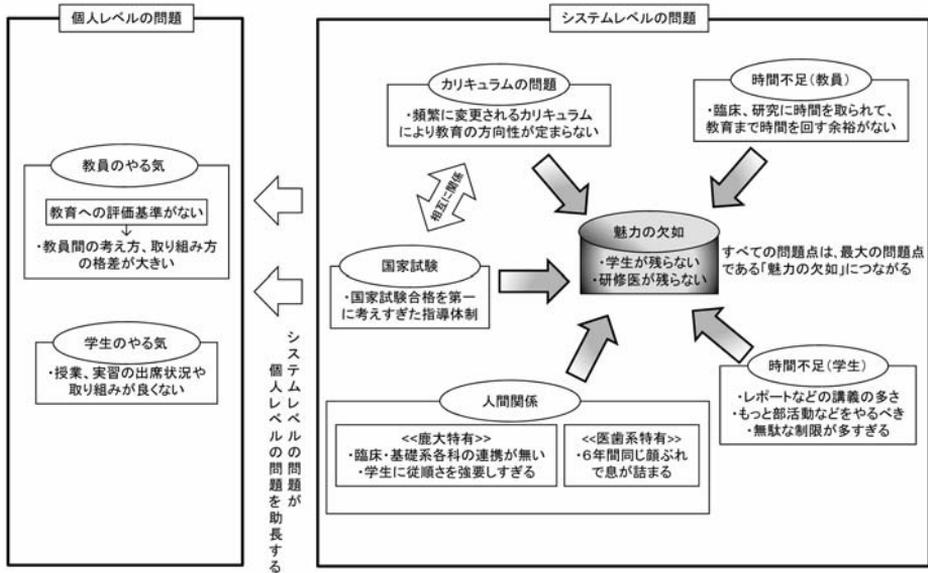


図1 グループ作業の一例 セッション3 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題点 (問題点抽出)」

グループ作業の一例 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題点(問題点分析)」

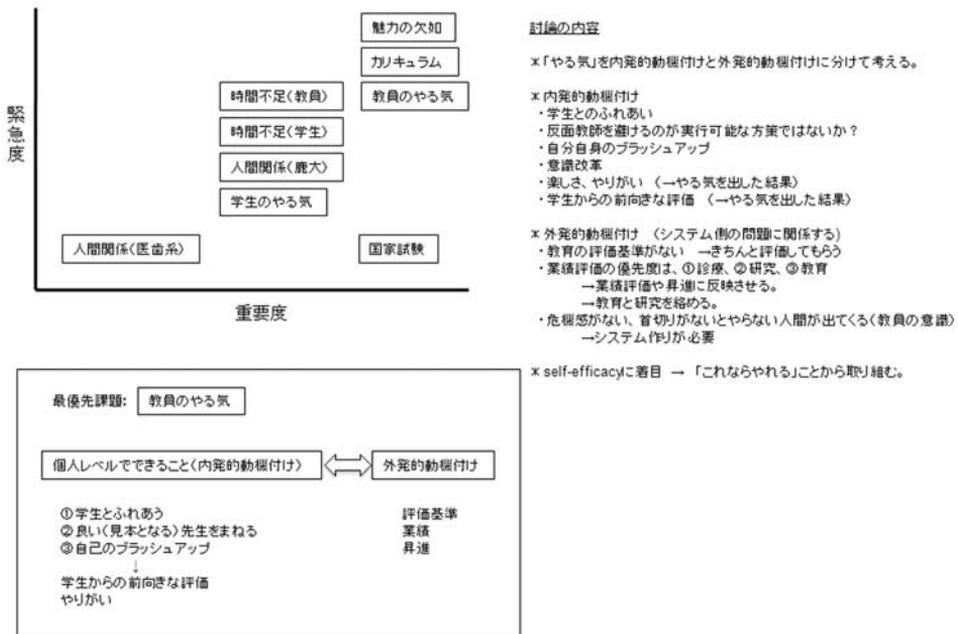


図2 グループ作業の一例 セッション4 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題点 (問題点分析)」

(学位に値する能力)を明確にすることが重要であることを述べられた。またこれに関連して、カリキュラム開発の方向性について「Planning forward」つまり科目毎の教育目標を積み重ねていくのではなく、「Planning backward」つまり卒業時に学生が有してほしい、もしくは有しているべき能力を具体的目標として設定し、それに到達するために各科目の到達目標を設定する、という方向性であるべき、と指摘された。さらにヨーロッパの事例を紹介された後、「どれだけ教えたか」という教育者中心の考え方から「どれだけ学んだか」という学習者中心の考え方にパラダイムを変換すべきと述べられた。

最後にセッション6で総合討論が行われ、ポストアンケートおよび参加者の感想を述べる場が設けられた。総じて教員が思い悩んでいる内容は類似していること、講座間の交流および教育に対する評価システムの構築の重要性などが共通認識として共有されたものと思わ

れる。

本ワークショップに参加して感じたことであるが、本来の趣旨である教育能力開発については、自分の教育について見直すことができた、通常ではあまり聞くことがない教育方法論について学べた、などの点で有意義なものであった。また本来の趣旨からは外れるが、教員間での問題認識が類似していることが分かったこと、またさらに外れるが、これまであまり話す機会のない先生方と話し合えることができたことは非常にありがたいものであった。講習会形式ではないワークショップの良いところを存分に味わうことができたものと思う。

最後に田口先生をはじめとするスタッフの皆さんへの感謝とともに、またこのような機会を設けていただければ、と勝手なお願いを申し述べて筆を擱きたい。



図3 スタッフ、参加者の集合写真